



いつもそばに クルママが

先月号で若者のための次世代カーメディア「ネクスト・カー・ジェネレーション」について紹介したが、では、インターネットではなく本誌を含めた自動車雑誌は、今後生き残っていくためにどうあるべきなのだろうか？ 太田さんはある映画(本)にヒントがあると考えた。

■文：太田哲也

担 当編集カトーから与えられた今

回のお題は、「自動車メディアはどうあるべきか」。インターネットで

クルマにまつわる記事が無料配信されるのに

対して、有料の自動車雑誌が生き残るのは難しいのではないかと…。

そんなことが言われて久しい。この連載の新担当として編集カトーが就任した2010年にも「メディアはどうあるべきか」「もし太田さんが編集長だったらどんな誌面を作るか」と問われた。

正直にホンネが書ける媒体は生き残れるはず

インターネットは「情報提供」が、雑誌は「価値の提供」がこれからの役割だと思ふ。「大人の事情」を優先した、ちようちん記事的、なもののは極力排除すること。プレスリリースをまとめ

たような記事ではなく、プロとしての視点で、時間をかけて内容を吟味した原稿を作ること。オレ自身について言えば、正直に本音で、でもフェアに書くことを常に心がけている。

カトーによれば「それは太田さんだからできること」と褒めてくれるけど(おちよくって

るのかな?)、そこに愛があれば、批評される立場の自動車メーカーも理解してくれるはずだ。

カトーが新しく担当となった時に、なぜホリデーオート(HA)でオレの連載が始まったのかと訊かれた。

初代担当モリタが誘ってくれたのだ。「太田さんは、変だ。だから面白いんだよ。特殊な人で、運転技術や感性は元プロドライバーだから超一流だけど、5年の療養生活を経て現代のクルマのことは知らないド素人。目線が好奇心いっぱいの子どもみたい。浦島太郎から見た自動車業界を書いてほしい」と。

自動車雑誌に限らず何事も歴史が積み重なると視点が硬直化するものだ。ライター陣が固定化し老齢化する。業界での立場を優先したり、ちようちん的な記事が増えたり。そういうことを読者は敏感に感じるはずだ。

オレ自身、もはや浦島太郎ではなくなってきた。自分自身の硬直化を避けるため、連載原稿の打ち合わせにはいつも編集担当と事前に長い時間をかける。原稿依頼書をメールするだけで顔を合わせないライターさんもいるらしいが、オレの場合は事務所まで長時間かかるから担当は大変だろう。でもそのお

そらく、自分自身も「クルママ」が問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による

でもそのおかげで連載も長続きしているのだと思う。読者の「今」をいちばん知っているのは編集者なのだ。

そもそも自分としては日々、自己再生を心がけているつもりだが、やはりどこかで硬直化は始まっているはずだ。我々の業界もそうだろう。そこでアンチテーゼとして、先月も触れたが「NEXT CAR GENERATION by 大学生プロジェクト(以下NCG)」を立ち上げた。

若者のクルマ離れが問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による

若者のクルマ離れが問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による

若者のクルマ離れが問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による

若者のクルマ離れが問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による

若者のクルマ離れが問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による

若者のクルマ離れが問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による

若者のクルマ離れが問題視される中、「クルママ離れなんて言わせない！」がオレが与えたテーマだ。それ以外は自分たちで考えなと言ったら、「大学生による



◀ネクスト・カー・ジェネレーションのホームページ。すでに記事レポートとして、大学生のJAIA(輸入車試乗会)助手席試乗インプレッションが掲載されている。今後、コンテンツを拡大していくということだ。●ネクスト・カー・ジェネレーション(NCG)ホームページ:
<http://ncg.sportsdriving.jp/>

大学生のためのクルマサイト。大学生によるクルマレポートや業界人インタビュー。大学生記者を広く募集」というコンテンツを考えてきた。

最初は悪くないと思ったのだが、出来上がったサイトを見てみると、どうもしっくりいかない。大学生によるレポートといっても所詮素人だから中身が薄いのだ。何よりも気に入らないのはホームページのトップページの写真で、仲間の大学生たちがアップで掲載されている。おいおい、オマエらアイドルじゃないんだぞ、という感じ。

それでも「プロに訊く！」と題した業界関係者への大学生によるインタビューは、それなりに読みごたえがあった（HA編集部からカトーも登場してくれている）。いったい何が良くて何が良くないのか…?

時代の変遷とともに 新たな目線が必要!

映画「永遠の0」を見た。百田直樹著の同名タイトルベストセラー本の映画化で、大ヒット

している。物語は、腕は立つが海軍一の臆病者と呼ばれた零戦搭乗員宮部久三（主演岡田准二）の孫が、祖父久三のことを調べていく中で意外な真実を知るといった内容。特攻のむなしさを知っていたはずの宮部（岡田准二）

が志願し突入するラストシーンが印象的だった。うっすらと笑みを浮かべていた。笑顔でサヨナラ…。涙があまりに止まらなくなつて、口元にしていたマスクで目を覆ってガンガン泣いてしまった。それ程感動した。

この映画を高3の娘も、友達と見たそうだが、とても感動したと言っていた。ちなみに以前に娘と話して驚いたのだが、空母を知らないと言った。「クウボ？ 航空母艦のことだよ」。



▶インターネット社会にあって、自動車雑誌はお金を払っても買いたい情報が乗っていることが必要不可欠となってきている。ホリデーオートは読者のみなさまの欲しい情報をこれからも提供していきます

「インターネットは素早い『情報』の提供が、

自動車雑誌は深い『価値』の提供が

これからの重要な役割だと思おう」

ヒットを生む要因だろう。

● ●
NCGの場合、視点を下げたことは良かった。しかし、コンテンツの中身は充実していなければならなかった。大学生のシートが結論を出しても、多くの人にとって学びがないし説得力もない。

● ●
反対に、専門誌の場合は、中身はプロであっても、入り口がいつもクロート目線だと、新しい読者の参入を狭めてしまう。ロングランの愛読者であっても、ずっと目線が同じでは飽きてしまいかもれない。どの道、新陳代謝が大切だ。

● ●
やはり時代の変遷とともに新たな目線を取り入れることが必要で、そういう意味では自動車雑誌は常に進化していくべきである。だからといって素人が書けばいいのではない。中身はプロ中のプロによる濃さがなければならぬ。

● ●
インターネットには情報はあふれているが信憑性も乏しく、凝り固まった意見も多く見られる。雑誌の場合は、情報を厳選し、二歩も三歩も踏み込んだ価値の提供を心がけるべきである。具体的には、巷ではこんなことが流行ってますとか、新技術はこうですとかだけでなく、それが社会に与える影響や

意義、人類の幸福への貢献度にも一言及すべきだろう。そしてもっとも深くクルマの面白さの本質を追求すべきだろう。そういう意味では、ホリデーオートも新車情報に止まらず、もっとカルチャーの要素を取り入れてほしい。

それをいつも同じパターンではなく、様々な形態に変貌させながら社会の変化に合わせていく必要があるだろう。オレもホリデーオートもだ。



▶太田さんとGT-Rの前・開発責任者である水野和敏氏とのインタビュー取材のヒトコマ。深い記事作りをしていくには開発者の声をじっくり聞くことが重要だが、それをそのまま載せるのではなく、ライターや編集者が魅力ある内容にアレンジしていくことも記事に付加価値を付ける

「Tetsuya OTA ENJOY&SAFETY DRIVING LESSONもてぎwith FORD」が5月18日に開催されます。今回の舞台はツインリンクもてぎ。南コースを中心としたレッスンに加え、東コースでの走行も予定。さらにフォード車が勢ぞろい！ フィエスタ、フォーカスに加え、発売前のエコスポーツも登場し、体験試乗会やプロドライバーの走行が体験できるサーキットタクシーなどを開催予定です。 ●http://sportsdriving.jp/